様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月　２０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 年～2011 年
課題番号：20530622
研究課題名（和文）臨床心理学における質的研究法教育カリキュラムの開発
研究課題名（英文）Development of the curriculum for qualitative research methods for clinical psychology
研究代表者　　能智　正博
（Nochi Masahiro）
東京大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30292717

研究分野：教育系心理学
科研費の分科・細目：臨床心理学
キーワード：質的研究法，カリキュラム，教育法

１．研究計画の概要

本プロジェクトは、臨床心理学における質的研究の役割について明らかにしつつ、その教育法について具体的なプログラムを作成することを中心的な目的とする。そのためにまず、文献調査や質的研究法を利用した研究実践を通じて、心理臨床実践技能との関わりも考慮しながら質的研究に必要とされる技能を明らかにすることを試みる。次いでそうした技能を高めていくために、現在内外の大学・大学院などの教育機関においてどのような教育内容と方法が施行されているか、文献資料の検討や教育現場の観察などを通じて、教育プログラムやカリキュラムの特徴をレビューし整理する。最終的には、質的研究法の教育実施の指針となるような参考書・テキストを作成する。

２．研究の進捗状況

臨床心理学における質的研究に必要な技能を考える際には、臨床心理学という文脈のなかでの質的研究の特徴を明らかにしなければならないが、この３年間ではまず、文献研究をもとに臨床心理の実践や実践研究との関わりについての論考を発表した。

質的研究は発展途上の研究法であり、自らの研究のなかで、臨床心理学に関わる領域に質的研究の技法を適用し、技法の発展に貢献していく必要がある。この３年の間で行った主なプロジェクトとしては、１つには、心理専門職の自己語りを対象にいくつかの異なる分析手法を用いることで、語りの意味の多相性を描き出そうと試みた。また、質的研究の新たな手法として自己エスノグラフィの過程を、事例的に検討した。

さらに、教育法の具体例を調査するために、Syracuse 大学の授業や英国カウンセリング協会の研究法教育プログラム、質的研究の国際学会で開催されている教育セッションに参加・見学した。また、国際シンポジウムを開催して、研究者間の対話も試みた。そうした体験を参考として、自らの授業で試みた教育上の工夫を、質的研究の教育テキストの一部に生かした。

３．現在までの達成度

この３年間のもっとも大きな達成としては、本プロジェクトの中心的な目標である、臨床心理学における質的研究の教育用テキストが完成に近づいたという点である。このテキストは現在、印刷段階に入っており、2011 年 5 月には東京大学出版会から、全 14 章約 380 頁の分量で出版される運びとなっている。

その一方、自分の質的実践の方は当初の計画ほどには進展が見られていないところがある。この３年間に行われたいくつかの試みの成果は内外の学会で発表し、紀要や書籍の一部などに発表してきたが、査読つきの論文として公表されたものは少ない。現在審査中のものもあるので、最終年で学術誌論文として形にしていきたいと思う。

４．今後の研究の推進方策

上でも述べたように、４年目である 2011 年度は、臨床心理学領域における質的研究法のテキストが出版される。このテキストを使って授業を行いながら、具体的な授業実践のなかで必要な教育方法についての工夫を蓄

積したい。また、継続して臨床心理学とその関連領域において質的研究を行っている研究者との合同の研究会や論文検討会などをもち、臨床実践に関わる質的研究の広がりと多様性について整理すると同時に、その教育内容として何が求められるのかを検討していく。これらの実践をもとにその工夫をまとめる形で、いずれはテキストの各章を補足するサブテキスト的な小冊子を作ることも考えている。

加えて、これまで収集した心理臨床家や研究者に対するインタビューのデータを分析・再分析しつつ、臨床心理学に関係するテーマでの質的研究の結果を、学会などで発表する活動を継続する。それをもとに、現在投稿中のものも含めて、学術誌における論文を仕上げる。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計８件）

① 能智正博（2010）．質的研究をどう読むか．東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，33，102-108．（査読無）
② 能智正博（2010）．臨床実践の研究法の教育―英国の試みについて．東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，33，228-229．（査読無）
③ 能智正博（2010）．臨床実践の研究法の教育―英国の試みについて．東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，33，228-229．（査読無）
④ 能智正博（2009）．インタビューにおける〈語り〉をどうみるか．東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、32、225-228．（査読無）
⑤ 能智正博（2009）．質的研究法の視点と実践研究．臨床心理学，9(1)，22-26．（査読無）
⑥ 能智正博　(2008)．質的研究と当事者理解．家裁調査官研究紀要，7，1-14．（査読無）

〔学会発表〕（計 12 件）

① 内藤哲雄・能智正博・丸山千歌・小澤伊久美　(2010.12.11)．PAC 分析のデータを実践者・被検者・第三者が共に語り合うデータセッション．PAC 分析学会第 4 回大会（抄録集 pp.16-18），横浜．
② Nochi, M. (2010.10.7). The meanings of constructing one's life-story: An attempt of collaboratively analyzing the process of an auto-ethnographic project. *The11th International Interdisciplinary Conference: Advances in Qualitative Method*. Vancouver, Canada.
③ Bamberg, M.，能智正博，渡邊芳之，サトウタツヤ（2010.6.27）．第２部「質的研究の基準」．国際シンポジウム『質的研究の最前線―移行のナラティヴと研究評価をめぐって』．東京大学．
④ 能智正博・原田満里子（2010.3.26）．自己エスノグラフィの実践における語りの揺らぎと気づきのプロセス―「メタ語り」から見た語り直しの機序に着目して．日本発達心理学会第 21 回大会　神戸．
⑤ 能智正博（2009.2.11）．対話としての・ナラティヴ・分析　日本音楽心理学音楽療法懇話会第 261 回例会　東京．
⑥ 下山晴彦・能智正博・植坂友里・中澤潤・市川伸一（2008.10.11）．心理学における実践研究の有効活用に向けて　日本教育心理学会第 50 回総会　東京．

〔図書〕（計７　件）

① 能智正博（印刷中）．臨床心理学をまなぶ 6：質的研究法（約 380 ページ）東京大学出版会．
② 能智正博（印刷中）．発達の質的研究法と実例（日本発達心理学会編）『発達科学ハンドブック』　新曜社．
③ 能智正博（2010）．臨床心理学的研究（池田勝昭・目黒達哉編）『こころのケア』（pp.188－200）学術図書．
④ 能智正博（2008）．失語症の〈語り〉を聴くこと―“病い”の構築という視点から　（やまだようこ編）『質的心理学講座２：人生と病いの語り』（pp.51-78）東京大学出版会．
⑤ 下山晴彦・能智正博（編）（2008）．『心理学の実践的研究法を学ぶ』（全 351 ページ）　新曜社．
⑥ 能智正博（2008）．よい研究とはどういうものか―研究の評価　（下山晴彦・能智正博編）『心理学の実践的研究法を学ぶ』（pp.17-30）新曜社．
⑦ 能智正博（2008）．質的分析法（下山晴彦・能智正博編）『心理学の実践的研究法を学ぶ』（pp. 225-240）新曜社．